

今週の為替相場見通し(2020年12月14日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		103.83 ~ 104.58	104.04	103.00 ~ 104.50
ユーロ	(ドル)		1.2058 ~ 1.2166	1.2108	1.2030 ~ 1.2230
(1ユーロ=)	(円)		125.79 ~ 126.73	126.04	125.00 ~ 127.50
英ポンド	(ドル)		1.3135 ~ 1.3476	1.3222	1.2950 ~ 1.3300
(1英ポンド=)	(円)	*	136.80 ~ 140.33	137.57	134.50 ~ 138.50
豪ドル	(ドル)		0.7374 ~ 0.7572	0.7535	0.7470 ~ 0.7670
(1豪ドル=)	(円)	*	76.90 ~ 78.78	78.40	77.30 ~ 79.80

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 103.00 ~ 104.50 円

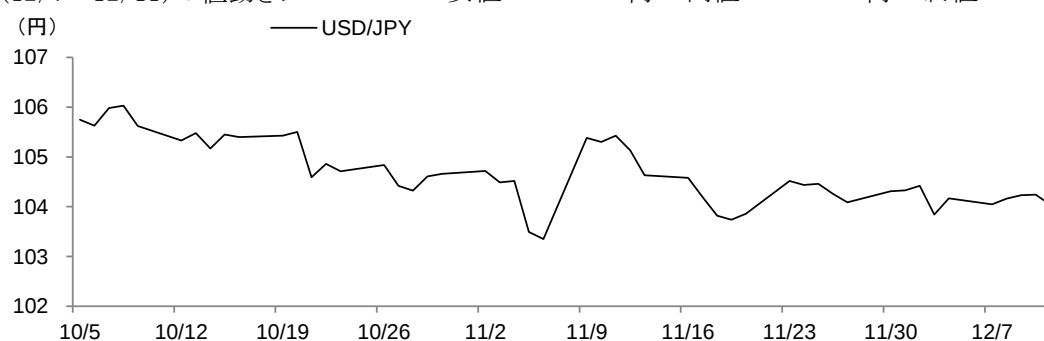
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上昇する展開。週初7日、104円台前半でオープンしたドル/円は、EUと英国のブレグジット協議が合意なしで打ち切られるとの見方が強まると、対ポンドでのドル買いが波及したが、対欧州通貨に対するドル売りが重しとなり、一時103.93円まで反落した。翌8日は、米追加経済対策の行方やEUの通商交渉の不透明感が燦る状況下、ドル/円は終始104円台前半での小動きとなった。9日も、ブレグジット関連のニュースが交錯する中、欧州通貨や資源国通貨に対するドル買いが強まると、ドル/円は、堅調に推移した。しかし、米追加経済対策案の合意が難航との報道に米株価がマイナス圏に沈むと、ドル/円は、104円台前半まで値を下げた。10日には、鉄鉱石価格の上昇に資源国通貨の円売りが強まると、ドル/円は一時週高値となる104.58円まで上昇したが、ユーロや豪ドルに対するドル売りや米金利低下もあいまって、104円台前半まで反落した。11日は、前日からのドル売りの流れを引き継ぎ軟調に推移。ジョンソン英首相の発言等を受け、EUの通商交渉は難航が予想される中、ポンド/円が下落。ドル/円もつれ安となり一時週安値となる103.83円をつけるも、直ぐに買い戻され104円台を回復。104.04円で越週した。

今週のドル/円相場は軟調推移を予想。16日のFOMCの結果発表を控えるなか、大きく動く展開とはなりにくいだろう。先月下旬に公表されたFOMC議事要旨では、金融政策は現状維持となったものの、新型コロナウイルスの感染再拡大の影響によって景気の二番底を迎えるといった懸念や、米金利がじりじりと上昇している状況を受けて金融政策の見直しを議論したことが明らかになった。特に、FOMCメンバーの間では資産購入の指針が話題となり、米国債の買入ペースの見直しや購入国債の年限長期化が追加緩和の具体案として協議された。また、議事要旨内には、最速で今回合意にて量的緩和の拡充に踏み切る可能性が示唆されている。かかる状況下、ドル供給の流れは変わらず、ドル売り地合いは継続しそうだ。ドル/円も月末にかけて実需の売りにあらがうことはできず、上値の重い展開を予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/7~12/11)の値動き: 安値 103.83 円 高値 104.58 円 終値 104.04 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 1.2030 ~ 1.2230 125.00 ~ 127.50 円

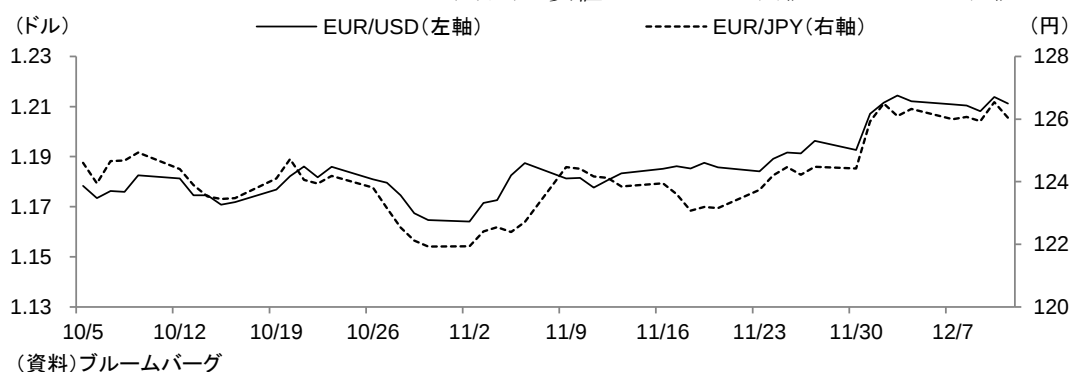
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は揉み合う展開。週初7日、1.21台前半でオープンしたユーロ/ドルは、合意なき離脱を懸念したボンド/ドルの下落に連れ安となり、1.20台後半まで下落したが、米経済対策の協議進展への期待感からヘッジファンド勢の押し目買いが入ると、週高値となる1.2166まで上昇。しかし、その後は利益確定の売りが継続し、ユーロ/ドルは1.21台前半までじりじりと下落した。8日にかけても上値の重いボンド/ドルに連れ安となり、ユーロ/ドルは1.20台後半まで下落する場面も見られたが、ユーロ買いは底堅く、1.21台前半まで反発した。翌9日は、リスクオフのドル買いが先行し、米株価が下げ幅を拡大する動きに、ユーロ/円の下落も重しとなると、ユーロ/ドルは、一時週安値となる1.2058をつけた。ユーロ/円は週安値となる125.79円をつけた。10日、注目されたECB政策理事会では、ラガルドECB総裁がユーロ高によるデフレ圧力への懸念を示すと、ユーロ/ドルは弱含む場面が見られたが、その後はユーロの買い戻しが強まり1.21台後半まで上昇。ユーロ/円は週高値となる126.73円まで上昇した。11日にはフォンデアライエンEU委員長が「合意なきが最もあり得る選択肢だ」と発言したことで、英ボンドが急落する中、ユーロ/ドルも一時下落するものの、ユーロ/英ボンドの買いが下支えとなり、ユーロ/ドルは1.21台前半。ユーロ/円は126円台前半で越週となった。

今週のユーロは底堅く推移すると予想。10日に行われたECB政策理事会では、パンデミック緊急買い入れプログラム(PEPP)の5000億ユーロ増額と9か月間の期間延長、貸出条件付き長期資金供給オペ(TLTRO)の1年間の期間延長、コロナ緊急長期資金供給オペの4回の追加実施など、おむね市場予想通りの結果となった。マイナス金利の深堀りはされず、政策金利に変更はなかった。ラガルド総裁の会見では、PEPPをすべて使い切る必要はないとしたものの、必要であれば再調整する必要があると発言し、今後の政策の柔軟性を維持したものの、追加金融緩和に一服感が生じている。さらに、10日のEU首脳会議で計1.8兆ユーロの中期予算とコロナ復興基金が合意されており、こちらもユーロ買いの材料。一方で、ドイツは今週16日から厳格なロックダウンを導入すると発表した。生活に必須とされない店舗は休業を強いられ、新年の集まりも禁止された。1月10日まで続けられるため、経済活動へのインパクトが懸念される。さらに、16日にユーロ圏12月PMIが公表予定となっている。11月総合PMIの結果は45.3と9月から▲4.7ポイント下落し、7月から4か月連続で低下し、好況・不況の境目である50を割り込んだ。内訳を見ると、前回から更に製造業とサービス業の業況判断の差が広がっており、製造業は依然50以上を維持したものの、サービス業に関しては41.7と、今年の5月以来の低水準を記録した。ユーロ買いの流れは継続すると予想するも、新型コロナウイルスの感染再拡大には注意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/7~12/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.2058 高値 1.2166 終値 1.2108
(対円) 安値 125.79 高値 126.73 終値 126.04



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3300 134.50 ~ 138.50 円

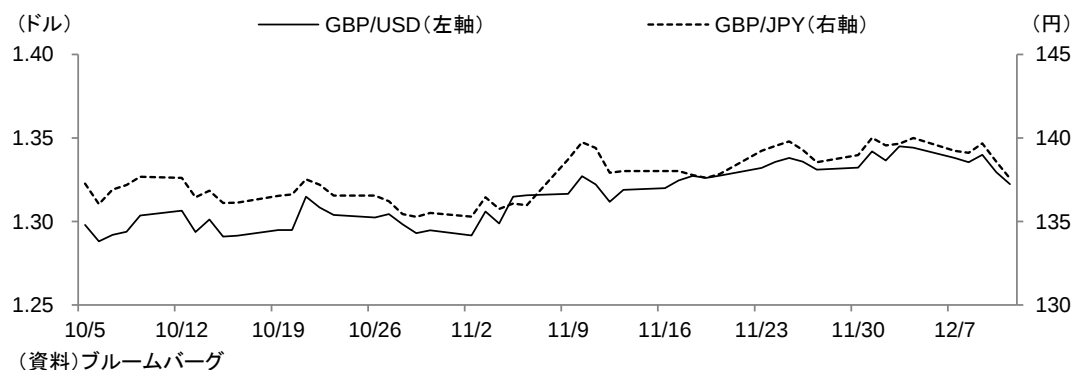
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、方向感に乏しい膠着の先行から、週後半は下押し。対ドルでの安値は4週間ぶりの水準にとどまったが、対円でのそれは5週間ぶり、対ユーロでは3か月ぶり水準まで落ち込んだ。言い方を変えれば、この間の主要通貨市場は、ドル安を基調としていたということであろう。一方で、ユーロの堅調は、ポーランドとハンガリーによる拒否権発動が警戒されていたEUの中期予算(2021~2027年)と次世代基金(コロナ復興基金)が、一転、あっさりと承認されたこと(10日)を好感した結果と思われた。足下ポンド安の要因は、英とEUとの将来関係交渉の不調に尽きる。同交渉を巡る経緯を振り返れば、これまで、英海域における漁業権の問題、(ブリテン島と北アイルランドの間の交易を円滑にするための)製品基準/競争条件の問題、決められたルールをお互いに順守させるための枠組みの問題の3点について、常に一進一退を繰り返してきたかのように報じられ続けてきたが、現在に至るまで、(この間も)その状況自体にはほとんど変化が見られない。しかし、圧倒的な力で押し寄せる変化は、もはや、話し合いをしている時間が尽きようとしているという事実だ。10日の時点で、ジョンソン英首相は、オーストラリア型の、関税、数量制限を伴うWTOルールに基づく通商関係に突入する可能性が高いことを警告し、「自由貿易協定のない離脱に備えよう」と呼び掛けた。いよいよ合意なき離脱の現実味が高まったわけだが、その割にポンドの下値が限定的だったのは、交渉期限が、13日まで、あらためて延長されたからと思われた。

今週の英ポンド相場は、英とEUの将来関係交渉の不調が続くことを前提に、続落を予想。本来であれば、新たに定められた13日(日)の期限を越えたところで、交渉が続くことなど有り得ないはずだが、こと英とEUの交渉に関しては、期限などはなんの意味も持たない。既に、年明け以降も英とEU間の(主にドーバー海峡を渡るものと思われる)物流の混乱を避けるために、それを移行期間とは呼ばずに、6か月程度の激変緩和措置を導入する可能性まで観測され始めている。交渉が、これまで延長を繰り返してきた最大の要因は、英側も、EU側も、「自らが交渉を打ち切った」という評価を後世に残したくないという思惑。こうした駆け引きの最大の被害者は、いつまでも続く不透明感に翻弄される、英/EU間の通商に関わる事業ということになるだろうが、英に占めるそうした被害者の比率と、EU加盟27か国のそれとでは、圧倒的に英の比率の方が高い。英貿易に占めるEU向け輸出の割合が50%を軽く超えるのに対し、EU27か国全体で見れば、英向けの輸出は6~7%程度を占めるに過ぎないからだ。英とEUの通商関係における混乱は、EU経済にとっても打撃には違いないものの、そう考えれば、英経済の被る被害の方がはるかに大きいのは自明のことと思われる。今週は、15日(火)に英8~10月雇用統計(ILO基準)、16日(水)に英11月CPI、18日(金)に英11月小売売上高などの発表が予定される他に、17日(木)に英中銀金融政策委員会の結果が発表されるが、市場の予想は現状維持で一致している。100人に聞けば100人が、「いずれは追加緩和(利下げ、資産購入増額など)に踏み切ろうが、移行期間終了後の混乱が警戒される今の段階で、残り僅かな緩和余地をすり減らすような挙措は取らない」と答えるような現状で、その通りの決定をポンドが材料視する可能性は考え難い。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/7~12/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.3135 高値 1.3476 終値 1.3222
(対円) 安値 136.80 高値 140.33 終値 137.57



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7470 ~ 0.7670 77.30 ~ 79.80 円

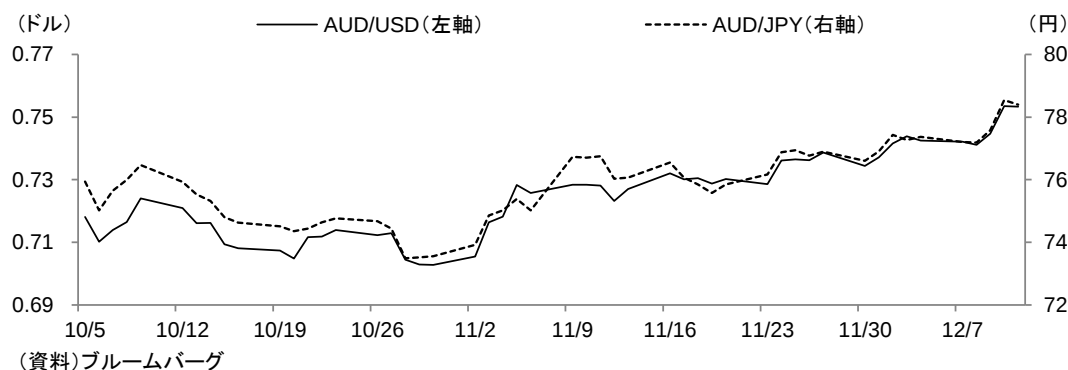
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上昇に弾みがつき0.75台のせ。7日、アジア時間内は0.74台前半での小幅な値動きに留まったが、ロンドン時間早朝に英・EU通商交渉が難航していることを材料にボンド売りが膨らむと0.7370近辺まで下落。NY時間にかけては米国での新型コロナ感染拡大やカリフォルニア全域でロックダウン措置が導入されたことを受けて米金利が低下すると、豪ドルは0.74半ばまで上昇した。8日、材料難の中、0.74台前半で小動き。9日、特段材料が無い中0.7485近辺まで上昇するがすぐに失速して0.7440台まで下落。10日、鉄鉱石価格の上昇を受けて豪ドルは買いが優勢に。米金利低下も相まって米ドル売りの流れが強まると豪ドルは0.7530台まで上昇した。11日、米ドル売りの流れが継続して豪ドルは一時0.7570台まで上昇するも、合意なきブレグジットへの懸念台頭でボンド安となると、米ドルが他通貨比上昇。豪ドルは0.7530台まで下落して越週した。

今週は15日に12月RBA議事要旨、16日FOMC、17日豪11月雇用統計が予定されている。鉄鉱石価格の上昇などを背景に豪ドルは足元上昇に弾みがついている。合意なきブレグジットへの懸念、米追加財政政策協議の難航等、懸念材料は残るものの、クリスマス休暇にかけてリスクセンチメントの回復とともに、今週の豪ドルは底堅い展開を予想する。また、今週発表される11月雇用統計はビクトリア州の規制緩和の影響を受けて更なる雇用環境の改善がみられる可能性があり、予想以上に良好な結果だった場合は、豪ドル上昇に弾みがつく可能性がある。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/7~12/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.7374 高値 0.7572 終値 0.7535
(対円) 安値 76.90 高値 78.78 終値 78.40



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。